

## 「しあわせのバケツ」

園長 川上 揚



先日の「花の日礼拝」でのお話に用いた絵本の内容を少しご紹介いたします。

～世界中の誰もが持っている、「しあわせのバケツ」。見えないけれど、みんなが持っている。あなたは「しあわせのバケツ」を持っている。

家族のみんなも。おじいちゃん、おばあちゃん、友だち、近所の人も、みんなバケツを持っている。みんな、見えないバケツを運んでいる。

なぜ、「しあわせのバケツ」を持っているんでしょう？それは、みんなのよい心や、よい気持ちを入れておくため。

バケツがいっぱいになると、とっても幸せな気持ちになれる。でも、バケツが空っぽになると、悲しく、そして寂しくなる。

誰かに、好きな気持ちを伝えたり、親切にしてあげたり、微笑みかけたりしたときに、「しあわせのバケツ」はいっぱいになる。これが、バケツを幸せでいっぱいにする方法。

反対に、誰かをいやな気持ちにさせたり、バカにしたり、意地悪なことをしたり、悪口を言ったり、無視することは、人のバケツに手を突っ込んで、空っぽにしている。

でも、あなたが誰かのバケツを幸せでいっぱいにすると、自分のバケツもいっぱいになるんだよ！人を幸せにすると、自分も幸せになれるんだよ。～

この絵本に込められている精神は、花の日の礼拝にぴったりだと思いました。

この花の日では、子どもたちが家からそれぞれに花を持ち寄り、その花を日ごろからお世話になっている人たちに感謝を込めてお届けするということをしていますが、その花を子どもたちが手渡すことで、どれだけ受け取った人に喜ばれることか。

分かりやすくいうと、たとえば、わたしがだれかに花を渡すということがあったとすれば、「ほんのお気持ちです」といいながら、それは、いくらか相場なるものにあわせた値段で見繕ってもらったもの。そのあたりの道端で育っていた花を摘んで、「どうぞ」ということはできません。しかし、子どもが、道端で見つけた花を本当にきれいだと思い、それを「どうぞ」といって渡すのならば、これほど喜ばれることはなかったりします。要は、花よりも、その花を「どうぞ」といって渡す子どものまっすぐな気持ちが喜ばれるのですから。

聖書には「受けるよりは与える方が幸い」という教えがあります。まさに、だれかのバケツをいっぱいにすることで自分のバケツもいっぱいになるという教え。そのことを、ときに子どもは大人に勝って実践するのです。